

逐次刊行

1 A 3.22

## 女性の長生きは”無駄で、罪”か

—石原都知事またまた差別的発言—

『週刊女性』11月6日号の「石原慎太郎都知事吠える！」という記事の中で、石原知事は次のように発言した。

「これは僕がいつてるんじゃないで、松井孝典（注：東京大学教授で惑星物理学者）がいつてるんだけど、”文明がもたらしたもっとも悪しき有害なものはババア”なんだそうだ。”女性が生殖能力を失っても生きるってのは、無駄で 罪です”って。男は80、90歳でも生殖能力があるけれど、女は閉経してしまったら子供を生む力はない。そんな人間が、きんさん、ぎんさんの年まで生きてるってのは、地球にとって非常に悪しき弊害だって……。なるほどとは思うけど、政治家としてはいえないわね（笑い）。まあ、半分は正鵠を射て、半分はブラックユーモアみたいなものだけど、そういう文明ってのは、惑星をあっという間に消滅させてしまうんだよね。」

この発言は、確かに松井孝典東京大学教授の言葉を引用した形をとっているけれど、他の報道によれば、「この間すごい話をしたんだ、松井さんが。私は膝をたたいてその通りだと。女性がいるから言えないけど……。」という発言もさらにあるということからも、石原知事自身にこのような考えがあることはまちがいない。これまでも『三国人』発言や障害者への差別的発言を繰り返してきた彼なので、さもありなんと思われるが、やはりこの女性蔑視の発言を許すわけにはいかない。

この記事にあるように、生殖能力のなくなった女性が無駄で罪と言うならば、生殖能力のない男性にも同じことが言えるのではないか。（男性たちよ、抗議しよう！）また女性は子供を産むためだけに存在しているわけではない。子孫を残すかどうかはその人の選択であって本能ではない。現在の特に女性のライフスタイルは多様化している。（『人生いろいろ』という歌があれほどヒットしたことを知らないの）さらに高齢者に対しても失礼な発言であり、冷酷である。非生産的で役に立たなくなった人間は必要ないという考えが透けて見える。（きんさん、ぎんさんは天国で怒っているだろう）

このような人物が東京都知事であるということが信じられないし、情けない。東京都はすでに「男女平等参画基本条例」を制定しているはず。知事こそが男女平等の実現に



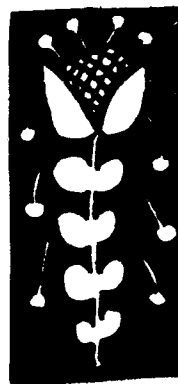
東京で日本と世界でいま何が起きているのか

石原都知事へのインタビューを掲載している『週刊女性』11月6日号

向けて先頭に立たなければならないのに、いまだに古い性別役割分担の意識から抜けきらず、産めない女は社会の邪魔者というまさしく女性の人権を踏みしめるような発言をすること自体、知事としての資質を疑わざるを得ない。

東京都民のみなさん、次の選挙の時はよく考えて投票しましょう!

そのうち 男性の平均年齢を超えた女性は  
「老醜長生き税」が課されたりしてー。  
なにぞ「税」をつくり出す名人ですから。



新しいパートナーシップを求めて

## アマランス フェスタ

amarance festa

またまた流れた「別氏制」、  
残念だが又、勉強の  
しかいがあるというもの  
です。

<主催講座より>

選択的夫婦別氏制について

井田洋子 (長大助教授)

11月22日 18:30~20:00 女性センター・アマランスにて

別姓問題って何だろう

個人が選ぶべき所を何故法が強制するのか? 3つの観点から見なくてはならない。

民法

1. 個人的害
2. 経済的害 (職場で不利)
3. 社会的害 (職場の人間関係)

女性が姓を変える→女性が害をこうむる。どうして女性が変わるのか

10年以上前から選択的別姓に変えなくてはと言われつつ、今国会でも流れてしまった  
氏名と人権

氏名とは単なる記号ではなく、もっと根源的な問題がそこにある。

最高裁判決文「氏名とは、個人を他者から区別するものであり、かつ個人の人格の象徴  
=人格権の一要素である」

民法750条の同性強制規定の意義

戦後新憲法の制定に伴って民法改正も課題となったが、戦前の家父長制度の名残と目される多くの条文が改正されないまま残されたことに原因がある。法が家族は一つの姓を持たねばならぬと強制している。「夫か妻どちらかの姓」という一見民主的な規定でありながら、実質的には男性優位の夫婦関係の保全に寄与している。現在でも98%の夫婦が夫の姓を選択している。比較法的に見ても、夫婦同姓制度を強制している国は少ないし、かつて強制していた国も、「女性の人権」という意識の高まり、女性差別撤廃条約の締結によって国内法を改正している。

民法だけでなく戸籍法 (家族を単位とした籍) 家族法の改正が続いて来る。

姓の問題は、男女の平等、夫婦の有り様、家族の有り様を問うものである。

直接的には女性の社会進出に伴って出てきた要請だが、仕事に係わる不利益を越えたより根源的な問題である。

反対論の根拠は感情論だけである。夫婦同姓は明治31年の旧民法実施以後の事でありそれ以前は別姓だった。子供の氏の問題というが、子供のために夫婦の問題を我慢するのはおかしいし、別の姓の兄弟姉妹を差別する社会風潮のほうがおかしい。

戸籍との整合性など調整が難しいというが、コンピューターは個人名のほうがやりやすいし、法律は人間の利益のためにあるので、人間が法律のために存在するのではない。

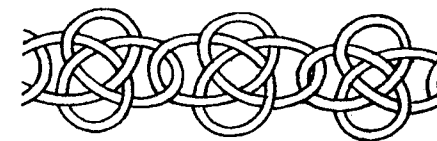
外国人差別、部落差別の根源となり、日本にしかない戸籍の存在そのものが、個人より家系を優先する基本的人権無視の存在として廃止されるべきである。

### ●今年8月内閣が発表した世論調査

夫婦は同姓であるべき: 29.9% (男性33.7% 女性26.5%)

▲ 選択的別姓がよい: 42.1% ( 40.9% 43.2%)

通称として別姓を使う: 23.0% ( 20.9% 24.9%)



### 戦争と性差

葛西よう子

私たち「テロにも戦争にも反対する市民の会」は11月中長崎の繁華街で毎夕ビラ配りと署名集めをした。積極的に署名して下さるのは高校生や若者、中年の女性、そして「私は経験がある、二度と日本軍が海外へ出てはいけな」と話して署名して下さる初老の男性だった。噛みついて来るのが40、50代の男性、「やられたんだから、やりかえさねば」がまず口をついて出てくる人達だった。高度経済成長の中で競争することが、毎日の生活そのものになっているのか、力への信仰、力あることが良いことだと思い込み、その激しさに愕然としたことが度々あった。力あるものが力を使って何がわるいのかー私は女性として、色々な場所で色々な機会に「男は力があるのだ、力のない女は黙っていてこい」という無言の圧力を受けて来た。その相手は自身では全然自覚していないのだが。「どうして男にはこんなに戦争が好きな人がいるのか?」と考え続けていた時、この「朝日新聞」の記事に出会った。そうだそうだと読み進めていき、最後に津島祐子さんの筆になることがわかって、やっぱり女性が書いた文章だったんだと納得した。



# 文芸時評

「戦争」という事態になると、副産物として、人間の性差が強くなり意識されるようになる。「闘争心」はそもそも「男」の本来持つ本能であり、子供を育てる「女」は「平和」を望むものだというように。「敵」に向かって、その「女」の扱い方を糾弾するのも、どうも大昔からの、戦争につきものの「行事」らしい。

かつての日本も、「穢れたもの」として女をさまざまな公の場所から閉め出し、権力者の一夫多妻は当たり前、さらに不衛生な「お歯黒」の習慣まであった。西欧社会から徹しく非難されてきた。今でも、案外そのイメージは外国に根強く残っていて、日本の

女はとても弱い立場なんだろう、と聞かれることが多い。とんでもない、最近の日本の女は強くて強くて、と答えることもできるし、法的婚姻率が異常に高い、窮屈な男中心の社会なんですよと答えても、まちがった答えにはならない。

「文明社会」となった現代日本では、性差の実態もかなり複雑なものになっている。それを「瞬間」うちに「古代」的単純さで短絡し

## 「性差」の複雑



藤野 千夜氏

### 短絡させる戦争の野蛮さ

### 個人差意識し抗する若者

佐作家

てしまうのが、「戦争」という野蛮な状態なのかもしれない。藤野千夜氏は「日本語とセクシ

ュアリティ」(岩波書店『21世紀文学の創造』男女という制度)で、現代日本語の小説における、男女の言葉のちがいを述べている。人称、語尾のちがいが、それに加え、話の内容にも性差が意識されてきた。

と言っても藤野氏自身は、「性差」よりも「個人差」をこそ意識しておきたい、と述べる。たとえば、「シマダ」という人物なら「シマダ」としか小説では書かず、それを「彼」とか「彼女」と言い表すことはしない。

確かに、二十年ほど前からだったか、日本の少女たちは自分を示すのに「ほく」、「おれ」、そして自分の姓を呼んだりして、人称の性差に対する抵抗感を示しつつきてきたのだった。改めて考えてみれば、昔の日本語では人称のちがいはなかったのだし、語尾のちがいもなかった。地方の言葉では今

でも、性差はほとんど存在しない。すると、本来の日本語の世界に若い人たちは今、本能的に戻ろうとしているというのだろうか。

欧米の戦艦に取り囲まれ、びっくりして明治維新を迎えた日本では、近代のキリスト教文化とともに、西欧式の「性差」も取り入れ

ないわけにはいかなかった。日本語において、女言葉、男言葉が区別されるようになったのだ。この「近代」では、性差は滑らかなど強調されてきたと、今、痛切に思わずにいられなくなる。

……そのうえ「性」という難題もある。けれども「性」、「性差」の複雑さにつき合いつづけてよとする人間は少なくとも、「戦争」という事態とは対極に位置している存在だとは言えそうだ。

津島